

減災ニュース

和田三丁目東町会 減災プロジェクトチーム 情報 No. 18

消防署のお勉強(その2)

火災連絡から消防車出動まで 23区の119番通報は東京消防庁(千代田区)の「災害救急情報センター」に繋がります。指令係員は火災の場所、種類、状況など必要な情報を聞きながら、それらをコンピュータに入力。コンピュータは各消防署の出動、待機状況や現場への到着時間などを瞬時に判断して出動隊の編成を行い、選ばれた消防署へ「予告指令」を発令します。この時点ではまだ火災発生との情報ですが、消防署では隊員が消防服を着込み、消防車へ乗り込みます。その間に住所や火災の種類など「本指令」が届くので、ただちに消防車は火災現場直近の消火栓に向け最短ルートで出動します。消防車のカーナビは特殊仕様で、消火栓の位置も表示されますが「消火栓予約システム」が搭載されており、1つの消火栓にポンプ車が重複して時間のロスをなくす仕組みになっています。現場に向かう途中でもさらに追加情報が次々と連絡されますので、隊長はそれらの情報と現場周辺の道幅などを元に消火作戦を決定、隊員に指示します。これにより現場到着と同時に各隊員が消火活動を開始できるという流れです。

ちなみに指令があってから消防士が防火服(全部で20kgの装備!)を着込む時間はわずか1分(!!)。消防車の出発までは2~3分、放水開始までは平均10分弱という数字だそうです。平成21年のデータでは全国で5万1千件の火災が発生し、内40%が30分以内に消火されているとのこと。また、消防署といえば「すべり棒」がイメージされますが、全員で階段を駆け下りたタイムを計ると階段のほうが早い、捻挫やケガの危険などから、今ではほとんどの消防署で撤去されているそうです。

消火活動の手順 現場に到着すると、隊員は消火栓からの吸水準備やホースの接続を行います。隊長は災害状況の把握と逃げ遅れた人の有無をまず確認。このため近隣住民からの情報収集を行います。最優先事項は「人命救助」なので、避難が確認できない人がいれば、真っ先に隊員に救助活動を行うよう指示します。また、指示がなくても火災現場に突入した隊員は、まず「人命探索」を行い、要救助者がいないことを確認後消火活動をおこなうこととなっています。



ホースの種類、接続 通常火災では40mm径のホースが使用されますが、震災時の大規模火災では川や海からの大量送水が必要となります。平成7年の阪神淡路大震災では、直径150mmの大口径ホースが何十本もつながれ送水を行ったとのこと。長距離の場合にはあらかじめ10本程度がつながれたホースカーも出動します。また、ホースの接続は差し込み式が主流ですが、接続の不安から昔はネジ式も多くあったとのこと。しかし、阪神淡路大震災で複数の自治体が協力して消火活動を行う際、接続方式の違いで消火活動に支障をきたした反省から、現在はほぼ差し込み式に統一されたそうです。

減災ニュースに関するご要望、お問い合わせ 松尾 03-5932-0083